
白銀の鎧と黃金の剣

あかつきいろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀の鎧と黄金の剣

【Zコード】

Z3483Y

【作者名】

あかつきいろ

【あらすじ】

主人公がヒロインと出会い、そこからわがままな事件に巻き込まれる話です。色々な神話や伝説の武器やらが登場します。楽しんでもらえば幸いです。

プロローグ（前書き）

どこかパクリ臭のような物がしても、どうか眞にせずに読んでください。

プロローグ

神話
それは様々な神や英雄などが生き、そして散つて行つた世界。

その力は人間界に生きるあらゆる生物にちりばめられた。その力は様々な者によつてふるわれた。だが、その力を持つ者は人間だけではなかつた。

馬や狼などの生物もその力を持つた。だが、その多くはある理由により死んでいつた。それは 暴走だ。そもそも、この力は神などの上位種がふるつていたものだ。それを生物がふるうのはおこがましいといつう事なのだろうか？

それを見かねたある男はとある組織を作り上げた。
その組織の名前は『神にはむかう者達』 フェンリル

プロローグ（後書き）

初めて書いた作品ですので、どんどん問題点等を教えてもらいたいなら幸いです。

これから、いろいろとよろしくお願いします！

世界は始まりを奏でる（前書き）

取り敢えず始めてみました。プロローグは意味不明かもしれません
が、どうかご容赦ください。

世界は始まりを奏でる

ある陽気な日に仕事場をのぞいてみると、支部長に呼ばれているところことなので俺」と、乾慎也は通路を歩いていた。

神にはむかう者達（「こからせフンコルとする」）は、本来各地で勃発する犯罪とかに駆り出されてしまう。ま、ぶつちやけ警察の裏組織的な？そんな感じだ。

だから支部長に呼ばれなんていひとはめつたにない。仕事をそぼつていかない限りは。

「ンンン

「乾です。支部長、入室してもよろしくですか？」

「構わんよ。早く入りたまえ」

自分で呼び出して、何言つてんだ？あの爺は。もつ年なんだから退職なりなんなりすりやこいのに。もちろんそんなこと一切口には出さなかつたが

「失礼します。それで支部長、どんな……御用……でしょう……か……？」

後半とぎれとぎれになつたのは、綺麗で可愛らしき女性がソファに座つていたからだ。あれ？おかしいな。幻？そんなわけないか。紅茶飲んでるし。その女性の髪は黒色だが、その眼の色は黒ではなく、金色だった。ハーフってやつかな？

「支部長。娘さん……いや、お孫さんですか？」

それならまだぎりぎりわかる。といつか、それ以外に何があるんだ？

「何故そこで依頼者という考えが出んのだ？孫が来ておるなら、おぬしなんぞ呼ばんわ」

「やかましいぞ、クソ爺。文句があるなら、俺はほかの任務を受けただけだからな」

うわ、しまった。つい癖でいつもの調子が出てしまった。俺が呼び出されるときは、たいてい普通の話し合いにならない。なんせ位の違いなんぞ関係なしで悪態つくからな。俺が女性の方に視線を向けてみると、顔をそむけて笑いを堪えていた。そんなに面白いか？

「真由美君、そんなに笑わんでもいいじゃねえ。わし、今すぐく傷ついたんだ」

「申し訳ありません。あまりに一人のやり取りが自然すぎて。……

くつ

まだ笑ってるよ。さすがに受けすぎじゃねえ？

「爺、あんたに纖細な心なんかあるわけないだろ。ついこの間呼ばれたときだつて、あんた確かギャルゲ……」

「あー、あー聞こえない聞こえない。何のことかわしゃ知らんぞ」

ナチュラルに否定しやがったよ、この爺。ま、そりゃビリでもいいんだが。それよりも大切なことがあるしな。

「それで？俺に依頼つて何なんだよ。別に俺じゃなくたつて頼める

やつまこへりでもこるだら?」

俺は支部長の隣のイスに座りつつ訊いた。

「おお、良く訊いてくれた。だが、その前に自己紹介とこいつ。
乾。いちらの女性は組織のとある役職に就いている、神崎真由美君
だ。

真由美君。このいけすかない男は、組織でもうランカーの腕利きの
男じゃ。安心してくれ」

「そうですか。それでは改めてはじめまして、神崎真由美と申しま
す」

「ひかりそはじめまして。乾慎也です。どんな依頼にしり、よう
しくお願ひします」

「あら、受けないという選択肢はないんですね。期待できたりです
「どんな物であれ、とにかくやり抜く。それが俺のポリシーですの
で。それで爺、依頼つて何なんだ?そんな風に固まってないで教え
てくれよ」

爺はなんかしらんがソファで丸まっていた。気持ち悪つ。

「こほん。依頼というのは、彼女、真由美君の警護をしてほしい、
といふ事なんじゃ」

「は?」

「おおつと、何か分からんが不吉な空気が漂つてきたな。どうしよ
うかな?」

世界は始まりを奏でる（後書き）

第一話、出してみました。今のところ読まれておられる方はいらっしゃらないようですが、頑張りたいのでもう少しあお願いします！

護衛の始まり（前書き）

第三話です。でれぬだけ定期更新しようと思こますが、用事でできなくて「お詫び」を赦してください。

護衛の始まり

「仕方ないな。俺は別にかまわないよ。でも、まさか俺だけにやらせるわけじゃないよね？」

「当たり前じゃん。いつもの一人を連れていけ。あれでも一応はAランカーじゃ。役には立つじゃん」

それはもうあっさりと承諾した。正直な話、たかが護衛でAランカー以上を三人も必要とする任務。一体どれだけ危険なのか、気になるとこもあつたがそれよりも重要なのは

「特務なんだろ?」これは

「支部長直々なんじやからそうじゃろ。そんなこと訊かんでもわかつていると思つとつたんじやが」

特務

要するに支部長、または本部から直々に送られてきた任務のことを指す。一応ここは日本支部。一応というのは、本部という物がぶつちやけ存在しないからだ。総局長が滞在している場所が、その時々の総本部になる。いったい今はどこのやう。

「それじゃあ、行くとしようか。準備はいいですか?」

「ええ、私は構いませんが……いいのですか?そんなに軽々しく受けてしまつて」

「そんなこと気にしなくても大丈夫ですよ。こんなクソ爺からといえ、一応特務ですから。受けないわけにはいきません」

「そうですか……。まあ、貴方がそれでいいのならいいんですが

なんか遠慮気味だな。彼女が依頼を持つてきたんじゃないのか?

それとも、彼女が何か重要な役割を担っているのかな?まあ、それ

は置いといて。仕事をするとするか。

俺と神崎さんは支部長室を退出した後、任務の話をしていた。どうやら彼女を隣町のホテルまで護衛する、という任務のようだ。思つたよりたいした任務じゃないないな。でも、それなら特務指定にされるわけがないし……まあ、いいか。悩むとか面倒だしな。俺は神崎さんを待合室に待たせて、受付に向かった。

「花音ちゃん。ちょっとといいかな？」

「はい～？あ、慎也さんじゃないですか。どうかしたんですか？」

「この子は達富花音ちゃん。フーンリルで受付嬢をやつてる元気な女の子だ。髪は明るい橙色。受付嬢というよりは、外で元気で遊んでいた方が似合っている女の子だ。基本的に任務の発注などをやつてている。

「あの二人組の馬鹿がどこにいるか知つてる？ちょっと任務に連れて行きたいんだけど」

「ああ、それでしたら先ほどお見えになるって

「誰が二人組の馬鹿だって？」

声のした方向を振り向くと、そこには男女一人が立つていた。俺が探していたやつらだ。

「お前らのことだ。つていうか、お前ら遅刻だぞ。もうすぐ昼時だぞ。また仲睦まじくやって来てくれたのか？」

「ちげえよ。今任務が終わつて帰つてきたところなんだよ。それで？俺らに何か用なのか？」

「そりだと言つてゐるだろ？月花、なんかやけに眠そうだな。またなんかしてたのか？」

「違つわよ！ ただ恥ずかしいから顔を伏せてただけ…ビリしてリーダーはいつも私たちをそういう目で見るわけ！？」

「そういう風に見えるからに決まってるだろ？ ところでお前ら、任

務だぞ。昼食を奢つてやるから手伝え

「マジで！？ 行く行く！ いやあ、腹減つてたんだよな。皿い店を頼むぜ？」

「食い意地張り過ぎよ、卓也。まあ、おなか減つてたのは本当だけどね」

この一人は俺が組んでるチームの一人、六道卓也と黒市月花ろくじゆくわだ。
一応A Aランカーだ。

ランカーの位は、Fを順当にE・D・C・B・BB・BBBと順番に増えていく。もちろんCからはプラスとマイナス判定も付く。まあ、Fから始まる輩で続くやつは少ない。

Fの地位はいわゆるなんでも屋みたいな雑事ばかり任せられる。そこで俺たちが守るべき市民の事を知るという意味も含まれているからだ。俺はそのFランクから始まつた数少ない逸材なんだけど、ね。

「それじゃあ、護衛の相手を連れてくるから。車をとつてくる間守つてくれよ？」

「え？ 任務つて護衛なの？」

「ああ、それじゃあ迎えに行つてくるわ」

俺が待合室にいくと神崎さんは何かの本を読んでいた。あれはイギリス英語で書いてあるから、イギリスの本かな？ さすがに内容とかはわからんけどさ。

「神崎さん、人の用意はできたんですが動けますか？」

「あ、乾さん。はい、大丈夫ですよ。それでその人は？」

「移動ついでに自「」紹介させますので、付いてきてもうつていいですか？」

「そうですね。お願ひします」

俺と神崎さんは、ホールに出て入口の所で待っていた二人のところまでいった。案の定二人はきつちりとした感じになつていた。いつもはふざけているが、仕事はまじめに取り組む奴らだからね。

「それじゃ、俺は自分の車をとつてくるんでここで待つてもうえますか？護衛はこの二人に任せるので」

「それは構いませんが。大丈夫なんでしょうか？」

「？……ああ、車の事ですか？それなら大丈夫ですよ。一応狙われても大丈夫なようにコーティングはしてありますから」

「わかりました。それではここで待つていてとします。それでは護衛、お願ひしますね」

「はい。ちゃんと守り抜いて見せますよ。だからできるだけ早く戻ってきて」

「はいはい。まったく、台無しだな」

俺は車を取りに駐車場の方に向かつて歩き始めた。

護衛の始まり（後書き）

いきなりお気に入りにしていただいた方もいるようで驚きです。その期待に頑張つてこたえようと思います。それでは、また明日。

そ

力の片鱗

俺が駐車場に到着すると、そこには一般人の格好をしているがその実力は少なくとも、Bランク以上の実力はあるだろうという気配を漂わす奴らが十人以上いた。その中の最も強い気配を放っていた男がこちらに向けて歩いてきた。

「先に訊いておきたいことがある。お前はあの女とどういう関係なんだ？」

「どういう関係ってなんだよ。俺と彼女はただの護衛と護衛対象ってだけだ。それより、あんたらも同業者だろ？ 何故彼女を狙う？ いくら認可されているとはいえ、一応罪にはなるんだぞ？」

「こちらも依頼なのでな。仕方がないのだよ」

「そうかい。こんな大量の人員を雇えるってことは相当の金持ちだな」

俺達の会話をしり目に、ほとんどの奴らは俺を囲んでいた。そしてナイフや銃をこちらに向けて構えている。俺がそれを分かつてるだろうに動かないでなおも喋っているのがじれったくなつたのか、一人の男が俺に向かってきた。それに釣られて十人近くの人間が動き出した。

「やめろ！ 勝手に動くんじゃない！」

リーダー格の男はがそつ叫ぶと、全員の動きがぴたりと止まつた。いい統率力だ。だけど、それはやつちやいけない選択だつたよ。俺は片足を思いつきり上げ、思いつきり地面に叩きつけた。

叩きつけた足で地面を揺らしそこにいた奴らを行動不能にした。そしてその足で動いた十人を包み込む程の魔法陣を展開し、その陣

に魔力をつぎ込んだ。揺れが問題ないほどになる頃には、もう術は完成した。

「
グラビティセカンド　フォーチュン
重力術一式・輪環
」

その陣から発生した普段人間が浴びている重力の約二十倍もの重力をたたきつけた。もちろんそんな物を浴びた連中は十秒と持たず肉塊、いや肉片も残らず消えた。まだ生き残っているのはリーダー格の男と、四人だけだった。

「……さすがは護衛を任せただけの事はあるな」「お褒めに預かりどうも。でももつたいないことをしたね。俺に挑むなんて愚を犯さなきや、まだ生き残つていられただろうに」「そのようだな。さすがにこれは引かざるを得ないようだな。最後に教えてくれ。君は一体何なんだ?」「へえ、さすがだね。あれが見えたんだ。いいよ。教えてあげよう。あれはな」

神喰狼フエンリルだよ

俺がそう告げると、男たちは顔色を変えた。俺はそれを無視して、自分の車のところに行きエンジンを動かした。そして俺が男の隣を通り過ぎようとしたらところで、男はぼそりと呟いた。

「その力は、いつか君すらも喰らうことになるだろ?」「それぐらいこの力を受け継いだ時から覚悟しているわ」

俺はそのまま車を動かし、駐車場から出て行つた。

力の片鱗（後書き）

第四話です。昨日は更新できず、すいません。それでは、またいざ
れ。

車の中で

「ほい、到着つと

「リーダー、車取りに行くだけでこれは時間かかり過ぎですよ」

俺が入口の所に車を置くと、早速文句を言われた。時計を見ると
うわ、十五分も経つてんじやん。確かにこりゃ時間かか
り過ぎだ。

「まあいいじやん。どうせ襲われてたんだろう?なんか地面の揺れを
感じたし、震脚でも使ったんじやねえの?」

「まあね。大した実力はなかつたけどね。どこかのチームを雇つた
だけで、実力は測つてなかつたんだろうけど。弱かつたよ。術でほ
とんどが一撃死。拍子抜けだつた」

説明していなかつたが、フーンリルというのはギルドみたいなも
ので雇われればなんでもするなんでも屋だ。雑務から探検、暗殺な
どなんでもござれ。だけど、護衛なんて物を任せられるのは大体特務
だけなんだけど。普通護衛なんて物を頼む奴には専用のＳＰがいる
からね。

「いや、すいません。待たせちゃいましたね。どうぞお乗りください

俺が助手席の扉を開いて神崎さんに手をのばすと、神崎さんはカ
バンの中をあさっていた。

「何を探してるんだろ?少しを待つていると、出した物はハンカ
チだつた。ハンカチ?何故に?そつ思つていると、神崎さんはその
ハンカチを俺の頬にあてた。

「あの？何かありました？」

「リーダー、血が付いてたんだよ。それで怪我したんじゃないかと思つてるんじゃない？」

「え？違うんですか？」

「違いますよ。この血は返り血です。俺に怪我を負わせることなんて、そういうできませんから」

「うわ、傲慢。でもそんなところが薄れる！」

「はつはつは。褒めるな。まあ、どうでもいいんだけど。まあ、その、ありがとうございます」

「いえ、これ位どうとこうとはありませんから」

「リーダー、そろそろ行こうぜ。俺腹減っちゃってさ」

「お前、いろんな意味で台無しにしてくれるよな。構わないけどさ。それじゃあ、乗って下さい」

俺は運転席、神崎さんは助手席。それに残り一人は後部座席に座つた。俺の車はワゴン車だ。説明し忘れたから言つておく。そして車は動き始めた。

「そういえば、この車対策とか大丈夫なんですか？」

「何ですか？……ああ、狙われないかつてことですか？それなら大丈夫です。この車は幻影色ですから。それに対魔法・魔術の素材でもできますし」

「幻影色……ですか？」

「あれ、知りません？そんな有名じゃないのかな？」

双眼鏡とかそういう媒体を使って見ても、こちらの事はわからないようにする物です。大体の人間は常識を持っていますから、人が多くいるような場所で撃つてきたりはしません。

まあ、撃つてきても俺の重力操作で捻じ曲げますがね

「リーダーって、ホントに容赦ないからね。どうせ駐車場で戦つた

相手だつて重力で押し潰したんでしょう?」

「だつていちいち相手にするの面倒だし。大体知つてるだろ?俺は光と闇の術式以外が苦手だつて」

「知つてるけどさ。なんか無残じやない?」

「そんなもん知るか。挑んでくるんだから相対するしかないだろ?全く話は変わりますが神崎さん」

「はい?何でしうか?」

「後ろの一人が腹が減つたとうるさいので、目的地に行く前に俺の行きつけの店で昼食をとつてもいいですか?」

「はい、それぐらいなら構いません。私もお腹は空いていますし、ね」

返答を訊いた俺は、俺の行きつけの店『カナリヤの涙』に向かつた。

車の中で（後書き）

第五話です。主人公ちょっと傲慢ですけど、飽きっぽいです。どうでもいい情報ですが。それではまた今度会いましょう。バイチャ！
（ゝー＜－）

カナリヤの涙

俺たちは『カナリヤの涙』に到着した。『カナリヤの涙』は隣町との境にある、小さい店だ。俺は駐車場に向かつて、車を止めて助手席を開けようとした時にそれは飛んできた。光の槍が。とっさに闇の術を手に展開し受け止めた。その方向をみると、先程のリーダー格の男が立っていた。同時に後部座席の二人も降りて、助手席を開けた。いくら対魔術に優れているといつても限度がある。避難させた方がいいと判断したんだろう。だけど、神崎さんは動こうとなかった。まるでこれから始まる戦いを片時も見逃さないようにしているかのように。構わないんだけどさ、無鉄砲な人だ。

「面倒だな。なあ、まだ追いかけてきたのか？もう無駄だと悟っているだろ？」

「無理だと理解はできても、諦める訳にはいかないんだよ。しつかし、それだけの光を片手で止めるのか……。やっぱり化け物だな」「当り前……と言いたいところだが、これは神喰狼の力は関係ない。単純に闇の術式で光槍の表面を削つてるだけだ」

「そんなことをさも当然にやってのけるところが、すでにあり得ないって……」

「俺の前に出てきた、つて事は死ぬ覚悟はできているな？お前には特別に見せてやろう。主神を喰らつた神狼の力をな」

俺は腕を交差させながら呴き始めた。神狼は今ここに顕現される。俺の右手に刻まれた十字架の刻印が輝き始めた。白銀の色に。

「フェンリル、久しぶりにお前も戦えそうだぞ？暇つぶしぐらいになるんじゃないか？」

『それは楽しそうだ。ここ最近の敵は暇つぶしにもなりはしなかつ

たからな。せいぜい期待を裏切るなよ？人間』

交差の手をほどくと、白銀の光は頂点に達し光が消えると宝石の結晶が俺を包み、次の瞬間には俺の体を白銀の鎧が包み込んだ。そつ気高き孤高の狼の毛皮を纏つたかのよう。

「それがフェンリルか。予想外だよ。結構普通なんだな」

「ははは。まあ、見た目はな。だけど、伊達に神狼と呼ばれてるわけじゃないんだぜ？」

俺は一気に動き始めた。俺の右手の刻印の正体はグレイプニール。北欧神話において、フェンリルを縛っていた魔法の紐だ。ある意味で、こいつは対神用の生物だ。その身体能力は尋常じやない。少なくとも眼で追うなんて不可能なほどに。ま、フルパワーには程遠いんだけど。

「ウツ！――！」

俺の拳は顔面を狙つていた。それにぎりぎりで気がついたのか、横に避けるとものすごい音が鳴り響いた。空気を殴つたことで、拳の威力は衝撃波になつて周りに散らばつた。

「外したか。やっぱ四分の一の出力じゃ避けられちまうか。ほんどの奴はこれで十分なんだけどな」

「怖ええよ。なんだその威力。回避した拳の攻撃が衝撃波に変わるとかどんなんだよ！」

「神狼だぞ？ それぐらい当然だろ。今度こそ当てるから、まあ味わつてみろつて」

「ううーー！ 店先で何やつてんのーー！」は戦う場所じやなくて、ご飯を食べる場所でしょうが！」

もう一度拳を構えて動き出そうとした俺たちに怒声が響き渡った。

「この声は……オーナーか？」

その方向を見てみると、エプロンを構えた女性が腰に腕を添えて立っていた。おお、結構さまになつてる。

「慎也！今すぐ戦うのやめないと、昼飯抜きにするよ。」

「うわっ！それは勘弁して下さいよ！」

俺は勢いもなくなつたし、しぶしぶ鎧を解いた。相手も拍子抜けしたのか戦う態勢をやめていた。ここに充満していた戦いの雰囲気がなくなつた。

「それじゃあ、こりっしゃいませ！『カナリヤの涙』へようこそ！」

そんな俺たちを迎えたのは満面の笑みを浮かべたオーナーの姿だった。

カナリヤの涙（後書き）

そんな訳で第六話です。お気に入り登録も増え、感謝です。これからもよろしくお願いします。それでは、ばいばい。（^_-^）／

説教と談笑（一）

「それで？なんでも店先で暴れてたわけ？」

「いや、俺は率先して暴れたわけじゃねえよ。ただ襲われたから自衛権を行使しただけ。これ以上文句を言つ氣なら、法律の方に言ってください」

俺は正座の姿勢で詰問されていた。うつ。俺は何もしていないのに。ところどころ俺のせこじやないのに。

「お黙りなさい。あんた神喰狼フヘンコレの力を開放してたでしょうが。知ってる？そういうのを過剰防衛っていうのよ。それとあんた」「ああ。なんだ？罰ならいくらでも受けれるだ。甘んじてな。俺が悪いのだから」

「あら、結構潔いのね。」これは忠告よ。あんた見たといひ、A A ランカーでしょ？その程度の実力でこいつに挑もうなんて愚の骨頂よ。金輪際こいついう事が無いようにしなさい」

「え？何その扱いの違い。俺ひょっとして嫌われてんじゃねえの？」
「あら、そんなことはないわよ？ただあんたと一緒にいると、あんたの事いじめたくなつてくるのよね。偶ハラハラに」

「うわ、ドジだ。ここにドジがあるわ」

「失礼ね。ま、いいわ。それで昼は食べて行くんでしょ？さつれと注文してよね。それともいつものでいいの？」

「うん。いつものでいいから、立つてもいいか？そろそろ足がつていうか、なんだよこの石は…どんな拷問の風景だよ…」

ちなみに神崎さんと卓也と月花はこいつを苦笑しながら見ていた。

俺と男の膝には十五枚ほどの板状の石があつた。重てええええ…！…

「ああ、もういいわよ。お疲れ様」

オーナー」と、花道楓さんは、俺たちに乗っている石の天辺に触つた。すると全ての石が砕けちつた。あー、足が痛い。

「それじゃ、料理を用意しとくからおとなしくしどきなさい。暴れたら、シバキ倒すからね」

「そんなことしないよ。疲れたから、早めにお願い」「はいはい」

俺が席に戻ると、早速卓也が話しかけてきた。こいつのテンションに付き合ひの、偶にだけ面倒なんだよな。

「リーダー、あの人とどういう関係なんですか?ずいぶん親しげでしたけど!」

「昔から世話になってる人だよ。それ以上もそれ以下もない」

「なんだ。面白くないな」

「お前を喜ばせなきやならん道理はない。それで神崎さん、こいつの処遇はどうします?」

さつきから黙つて座つている男 確か、白鷹だつたかな?

フルネームを公表する気はないみたいだけど。全員の視線が自然とその男に集まつた。もっと肩身狭くなつたみたいだけど。神崎さんは淡く微笑みながら、白鷹に話しかけた。

「白鷹さん?あなたはこれ以上私たちを襲う意思はありますか?」「ない。神喰狼^{フエンリル}の力は把握した。これ以上挑んだつて僕の命を捨てるだけだからな」

「それなら構いません。無用の命を捨てる必要はありませんから」「そうですか。いつもなら甘いと切り捨ててしまうところですが、

依頼主がそういうならいいでしょう。俺は何もしません

「リーダー、この人の仲間に何の術を使つたんですか？」

「輪環だな。全体攻撃用の魔法。重力系統のな

「重力一式ですか？そりやあ、『愁傷様ですね』

「上下左右から通常の二十倍ほどの重力を叩きつけ、体を微塵も残さずに潰すつつ技だからな。そりやあ、痛みも半端じやなかつただろうな」

魔法や神話系統の物が全世界に明らかになつて早二十年。2038年現在でも、魔法などの技術で新たな素材ができている。

魔法は四系統・炎・水・土・風に加えて、二系統・光と闇つまり六系統で構成されている。俺が得意な術は闇と光の攻撃系の魔法。回復は全くと言つていいくほどできない。

フーンリルがきて、俺たちのような力を継いだ者は光を見ることができるようになつた。俺達は言つてみれば、異能者つまり異常の塊みたいなもんだ。力事態は太古から存在した。だが、たいていの奴は迫害される。当たり前だ。こんな気味の悪い力を持つ奴と一緒にいたいと思う奴がいる訳がない。

「お一人もやつぱり神話武器を持つてるんですか？」
〔ゴッドウエポン〕

「俺たちは持つません。俺たちの得意武器は、刀と槍なんですけど。職人のオーダーメイド品なんです。材料はわざわざリーダーが取つてきてくれたんですよ？」

「すごいですね。ちなみにその素材つて？」

「刀の方は、アジ・ダハーの牙。槍の方は神話世界にのみ存在する鉱石です」

「…………え？」

さてはていつたいどんな反応をしてくれるのやら、楽しみだな。

説教と談笑（1）（後書き）

そんなこんなで第七話。今回と次回は、一応説明不足の部分を説明する回にしたいと思います。それでは！

説教と談話（2）

「ええええええ――――――つ！ アジ・ダハーカつてあれでしよう？ 大洋の底の方に封印されていて、世界の終末に人類の約三分の一を殺す、っていう伝承持ちの竜でしょう？」

おおひ。やつぱり凄いリアクションだな。俺は微笑を浮かべながら、ダージリンティーを飲んだ。ここのお茶って美味しいんだよな。そんでサンドイッチを食いながら説明を続けた。

「ええ、そうですよ。あとちょっと訂正で。確かに伝承では海の底
が高い山に縛られている、となっています。でも、実際は異世界を
泳いでるだけですから」

「でもリーダー三分の一の人を殺すなんて伝承を持っている竜と交渉してくるのは世界広しといえども、リーダーと魂持ちの人たちだけだと思うよ」

名前の通り、各神話の英雄や神様の魂をその身に宿す人たちの事だ。その人々は、魂を宿することでその者が使っていた武器ゴッドウェポン神話武器を使う事が出来る。

でも、そうではない人もその力を継ぐことができる。
か色々あるけど、ほとんどの奴らは因子持ちだ。

その武器をふるひのに必要な因子を持つてしれば、誰でもふるひ事が出来る。でも、神や英雄の武器だ。^{ミスティック・ウエポン} そう簡単に振るえる訳がない。そこで開発されたのが伝説武器。

「それで、どうやってアジ・ダハーの牙をもらつたんですか？」
「簡単ですよ。俺が生きている間に世界の終末が起こつた時、俺は
アジ・ダハーに手を出さない。その代わりに、牙を一本もらつ。

そういう契約です」

フエンリル

「アジ・ダハーカも神喰狼は障害にしかならないだろうしね。ひとつとしたら一人の人間も殺さずにリーダーと出くわして、よくて重傷、悪くて死亡するかもしないからね」

「それは…… そうかもしれないが。 でしたら乾さんは遭遇しても、知らんぷりする、という事なんですね?」

「そうですが。 何か問題でもありますか?」

「問題つて……」

あれ? ちょっとあっけからんとしそぎたかな? するとじれつきから黙りこくっていた白鷹がしゃべり始めた。 おお、やつとか。

「それで、神話世界の鉱物とは何なんだ? 神話世界に入ることができるのは、相当地位が高い者だけだと聞いていたんだが……」

「俺は創始者の知り合いだからな。 そのツテもあるけど俺は一応、

フエンリル
神喰狼だからな。 あそこの撃は『すべて自分で対処せよ』だからな」

「 そうなのか。 というかこの硬度、なんか覚えが…… ひょっとしてこれ、オリハルコンか? 神話世界でもめったに見つからないっていう、あの?」

「ははは、正解。 オリハルコン事態は別に珍しくない。 でも、発見されるのはもう焼け野原になつた場所がほとんどだ。 そういう場所にはいるんだよな。 魔獣の類が」

「なるほど。 力を制御されている者は違い、己の力を理解しているから、か。 ちょうど銃だけを持つた人が虎に挑む感じか?」

「 そうぞ。 それで俺がとある場所で見つけた、つてわけ。 それを知りあいの鍛冶屋に持つて行つて槍にしてもらつたつてわけ。 わかつたか?」

「私たちがA Aランカーになつたお祝いつて事でくれたんだよ。 あの時は驚いたね。 一級武器も有象無象の類に見えるほどの武器が、目の前にあつたんだから」

「リーダーって周りには優しいよな。こんな上等な物まで用意してもらっちゃってさ」
「俺はそんなのなかつたからな。せめて周りの奴には、と思つていただけさ」

事実、俺がUランカーになろうと褒めてくれる奴なんかいなかつた。こいつらを除いたら。話が一区切りついたところで周りを見つみると、全員が食い終わっていた。

「それじゃあ、そろそろ行きましょうか」

「はい、そうですね。それでは、お金は

「俺が払つときますよ。このぐらいの出費全然痛くありませんから」

「でも、やはり依頼主としてここは私が払つた方がいいでしょう」

「大丈夫ですよ。リーダーの貯金見たら、たいていの物取りは盗みをやめるレベルだから」

「そうだな。なんせ貯金が億いつてるからな。UJの値段はお手頃だし全然痛くないだろ」

「そういうこと。それじゃ、神崎さんを車まで運んどいて。それで白鷹、お前どうするんだ?」

白鷹はとつと扉を開いて出て行こうとしていた。はつきりとした性格だな。俺が呼びかけると足を止め俺の方に寄ってきた。俺は精算を済ませて歩きながら話をした。

「何がだ? いつもの通りの生活を送るだけだが」

「お前を雇つたのは大金持ちか、相当の家柄の人間なんだろ? 普通に考えて、何かしらの圧力が掛かつてるとみて間違いない」

「それでも仕方ないだろ。本来、任務に失敗するという事は同時に死を意味しているのだから」

「お前、俺らのチームに入れ。俺に挑んでくるその根性、気に入つ

た。俺らのチームに入れば、それなりの報酬は保証するぜ？なんなら、お前のチームごとはいってもいい

「……二、三日時間をくれ。こんな話、俺一人で決めるわけにはいかない。生き残ったメンバーと話し合って決める

白鷹はそう言って自分のバイクに乗って、どこかへ走り去って行つた。これで良し。俺は自分の仕事に戻るでしょうがな。そう思いつつ、俺は三人の所に駆け足で急いだ。

説教と談話（2）（後書き）

自分が思つてゐるより読んで頂いていた方がいたことにびっくりです。ありがとうございます。感謝感激雨あられ状態です。これからもがんばっていきますのでよろしくお願ひします！（^ー^）／

護衛の終わり

道中は特に問題なく、（太陽が暖かくて眠りかけたのは秘密だ）車に一時間ほど揺られて隣町に到着した。むしろ何の障害もなくて拍子抜けしたぐらいだ。

ホテルの前に到着すると、数名のホテルマンの人人が立っていた。まあ、予約ぐらいはしてるよな。俺はその前で車を停めて、助手席の扉を開けた。

「それじゃあ、これで任務は完了って事でいいですか？」
「ええ。いじままでありがとうございました。怪我などはありませんか？」

「あるわけありませんよ。それでは、田舎はわかりませんがいじでの滞在をお楽しみください」

「……よくわかりましたね。私が日本に住んでるわけじゃないって事」

「うーん、なんていうんでしよう? こいつ、全体の雰囲気のような物がこの国とは違うっていうのか。まあ、そんな感じです」
「わうなんですか。それじゃあ、はい」

神崎さんは俺に向かつて右手を差し出していた。？これはどういった事？ 外国風に口付けでもしる、ってことか？いや、違うな。これはひょっとして……。

「いへ、ですか？」
「はい」

やつぱり握手か。そう安心して、握手をしたとたん俺（多分神崎さんも）の頭に何かがほとばしった。そして、一瞬だけ神崎さん

から黄金の剣のようなものが見えた。俺たちは同時に手を離し、口の手を見つめていた。あの姿は一体……？

「お嬢様、もうよろしくでしょつか？さすがに九条様もくたびれていらっしゃるでしょうし……」

「…………そうですね。それでは爺、彼らに部屋を用意して差し上げて」「そこまでする必要はありません。言つほど働いてはいませんしね。俺たちはこれで失礼します」

俺がそう言つて車の方に戻ろうとするとき、あの一人がいらん事を言い始めた。

「ええ、泊まつていきましょひよ。せつかく神崎さんも『厚意なんですし』

「そうですよ。こんな時以外、この町に来たりしませんよ～思い出作りに、ね？」

「ね？じゅねえよ。」いつも時は遠慮しどくのが筋つてもんだろ」「いえ、せっかくですしお願いします。お嬢様の顔を立てると思つて」

「……それなら一般客用で三人部屋を一つか、二人部屋を一つお願ひします」

「かしこまりました。君達、お嬢様をお部屋にお連れしておいてくれ」

「「「かしこまりました」」

そういうと、そこには俺たちを除くと誰もいなくなつた。俺的にはどうとと帰りたかつたんだが。

「やういえばリーダー、」の後暇だつたら俺の修練の相手して下さによ

「え、するい！それなら私も、私もしてよワーダー！」

ひとまず、修練ついでにこの調子に乗った二人もシバクとしようかな。

護衛の終わり（後書き）

はい、よくわからないかもしけませんが護衛もなんだかんだで終了。これからだんだんと面白くしていくひとつと思っていますので、乞うご期待。

そしてホテルの一室に着いた俺たちは、荷物を置くとすぐにフロントで修練用の場所がないかどうか聞きに行つた。

「それでしたら、裏庭は素振りぐらいのスペースはありますよ。それでもよろしいでしょう?」

「それでかまいません。ありがとうございました」

俺たちはすぐに、裏庭に歩いて行つた。そこには模擬戦闘にもつてこいの広さがあった。確かに素振りだけのスペースと言えるだろう。

「それじゃあ、模擬戦を始めるから準備をしどけ。といつても柔軟運動程度だがな。俺は結界を張つておく。周囲に影響を及ぼさないようにな」「はーい」

一人が柔軟運動をしている間に、俺は結界を張るためにぎりぎりの所に四枚の札を張りに動いた。四端にある木に張つた。そして札に魔力を流し込み、結界を完成させた。よし、これで終わり。

「これで良し。それじゃあ、そろそろ始めるぞ」

「それで武器はどうするんです?まさか素手でする訳じゃないですね?」

「当たり前だ、武器はこれ。世界樹の枝から作られた剣と槍。これら存分に振り回せるだろ」

「了解。ところでこれ、どんな結界なんだ?影響を及ぼれないって言ったつてどうやって?」

「『』の部分だけを異界につないだ。つまりいくら振り回しても『』を傷つけても、現実世界に影響は出ない、というわけだ」

一人に剣と槍を渡して、俺は一本の木刀を構えた。素手による近接戦闘は俺の得意分野だから、ひょっとしたら間違えて二人の武器を破壊してしまうかもしれない。それじゃあ、修練にならない。だから俺は、一番目に得意な双剣を選んだ。

そこから俺たちは修練を始めた。初めは軽めに、だけどだんだんと激しく動き始めた。周囲には俺たちの掛け声と、ぶつかり合う音が鳴り響いた。

「どうした！？動きが鈍ってきてるぞ！もう疲れたとか言ってくれるなよ？」

「当り前だろ。天心流剣術

崩天黒刃！」

卓也は一本の剣で同時に三連撃を叩きこんできた。その剣撃を俺は全ていなし、容赦なく手首に一撃を叩きこんだ。

「隙が多すぎるぞ！次、来い月花！」

「分かってるよ！北竜葬送流槍術

葬竜演武！」

槍頭と石突きの両方で俺にぶつけようとしたが、双剣を石突きの時にぶつけて体勢を崩した後、卓也と同じく手首に容赦なく叩きこみ武器を落とさせた。

「ほい、これで終わり。あのな、お前らそんな隙が多い技を使わなくてもいいんだよ。これが模擬戦だったからいいけど、もし実戦だったらお前らが攻撃を当てられてたのは手首じゃなくて頭か、体だ。いつでも隙は少ない方が良い。まあ、わざと隙を見せて挑発するつて手段もあるけどお前らにはまだ早い」

「「はーい、わかりましたよ」

「そうふでくされるな。前にやつた時よりは技の速度も実力もはるかに上がってる。そう悲嘆に暮れることはない。ま、今のまんまじや俺から一本取るのには相当時間がかかるがな」

そんな事を話していると、突然俺が敷いた結界が壊れた。何事かと思つてそちらの方を向いてみると、そこには神崎さんが立つていた。

修練（後書き）

続けて書いてみました。いや、面白くなつたと毎回つけて楽しんでください。
では、また。（^_^）／

乾さんたちと別れた後、私こと神崎真由美は最上階のVIP専用ルームでくつろいでいた。今回私が日本に来た理由は、婚約者である九条泰斗さんと会うためだ。だけど、九条さんはある事情でいま仕事に出てるのでここに到着するのは一、二日後になるらしい。

「それにしてもあの時は一体……？」

乾さんと握手した時、乾さんに一瞬、それもぼんやりとだけ白銀の色の狼が見えた。おそらくあれが神喰狼なんだろう。でも私は反応したって事は彼は

「お嬢様、よろしいですかな？」

「ええ、構わないわよ。それでどうかしたの？ギルフォード」「

「彼らの動向を確認してきました。彼らは今、ホテルの裏庭のスペースで模擬戦をしているようです。詳細はわかりませんが」

「ありがとうございます。それにしても分からないうてどういつ事？」

「結界を張ったようにして、その向こうが見えないのです。しかも、その結界も相当な強度を持つておりまして。気づかれずに突破するのは不可能と思い、戻ってきた次第です」

「どれだけの魔力を保持しているのでしょうか？」

ギルフォードの力を持つてしても、気づかれずに突破するのは無理と思わせるなんて

「それはわかりかねますが。それよりもお嬢様

「ん？何か言いたいこともあるの？」

「はい。お嬢様は何故、彼にそこまで興味を示されるのですか？確かにあの若さでランカーといつのは珍しいですが、全くいなわけではありません。

それはお嬢様でもわかつていらっしゃるでしょうか。それなのに、なぜ
?」

それは当たり前の疑問でしょう。おそらく彼は私と同じ純血種。そ
うであるが故に、あのような光景を見せたのだらう。

「ギルフォード、私は神話や伝説の武器へとの姿を変える事がで
きるサルジストの純血種。

そしてここからは私の想像になりますけど、彼は、乾さんはおそらくサルジストの力をふるう事が出来るクラストの純血種です。その証拠に、彼は私の持つ力に反応した」

「なんと。まだ生き残っていたのですか?

それでは彼は、最後のクラストの純血種ということになりますが…

…

そう。私のようにサルジストはまだ少ないけれど現存している。
けれどクラストはサルジストなどと交りあうことで、その血の純血
がいなくなつた。純血種がこの三十年以上発見されなかつたことで、
クラストの純血種は絶えたのだと思つていた。でも、そうではなか
つた。

「それで彼らは、ホテルの裏庭にいるのね?」

「はい、そうですが……まさか彼らの所に行く氣ですか?」

「そうよ。どうせこのまま待つっていても暇だしね。どうせ二、三日
は来られないのだし」

「わかりました、が。行く前にその格好と髪をじうじかして下さい。
乱れ過ぎです」

私はギルフォードの言つとおり髪を梳いて、服のしわを元に戻し
て裏庭に行くと、そこにはギルフォードが言つていた通り巨大な結

界が張つてあつた。

その結界に指が触れると、途端に結界は壊れて驚いた表情で立つて
いる三人がいた。あれ？

EX・神崎視点（後書き）

ギルフォードといつのは、あの執事の事です。ついに1000PV
突破！

やつたぜ、＼！それじゃあ、また今度ーバイバイ！（ゝーゝ）／

喫茶店にて

ホテルにある喫茶店で俺たちは談笑していた。

結界を破壊された時は驚いたが、それは彼女の手に聖属性が混じつていたせいだった。俺がこの周辺に張った結界は闇属性。異なる属性の力に反発し、耐えきれなくなり壊れてしまつたんだろう。

それでも、長時間触れていて砕けたならまだしも、彼女の顔を見るにあればただ触れてしまつただけで壊れたという感じだ。どれだけ内包量と密度が高いんだよ。

もしかしたら、さつき来てた執事さんが何かしたのかもしないけど……。

「それで、神崎さん。どうしてあんな所に？」

「え！？えーと、相手が来てなくて散歩をしてたんですけど……」

「要するに、暇だったんでしょ？」

「……はい。その通りです」

着いたはいいけど、相手が来ていなくて散歩してたら偶然ここに着いた、か。いや、違うな。彼女は俺の事を探つている感じがする。暇はその通りなんだろうけど、こちらの事も探ろうつて感じか？まどろつこしいのも嫌だし、ここはもうソソ单刀直入に言つとくか。

「それで？神崎さん、俺に何か用があるんじやないんですか？わざわざ執事さんを俺にかけしかけるぐらいなんですか？」

「……気づいてらっしゃつたんですか？あれでもギルバートは元S+ランカーの実力者なんですよ？」

「それが何ですか？そんなことはどうでもいいんです」

大事なことは、貴方が俺にどんな用があるのか、という事なんです

から

「……では率直にお伺いします。あなたはクラスト最後の純血種なんですか？」

……やっぱりその話か。結構うんざりするな。爺たちがこの情報は隠蔽してるけど、やっぱり純血種にはわかるのかな？

「その答えはイエスとノーの両方。確かに男でクラストの純血を継いでいるのは俺一人だ。

だが、人間の純血種が俺一人か、と訊くとそれは違う。俺には一応だが、姉と妹がいるからな」

「一応? どうして一応なんですか?」

「……姉貴はどこ行つてのかもわからない。その上生存不明だし。妹に至つては、もう俺と同じ乾姓を名乗つていない。千葉家の養子ということになつてるからな」

「数字持ち（ナンバーズ）。それも番外エクストラですか」

「そうだよ。俺が爺たちと相談してそうしてもらつたんだ。俺はまだしも、あいつはまだ未熟。

俺の傍にいて狙われるよりは被保護者としては格式も高い数字持ち（ナンバーズ）、それも番外エクストラの方が良い」

数字持ち（ナンバーズ）とは、名字の方に一から十の数字を持つ者たちの事だ。一桁の者はファースト、二桁の者はセカンド、三桁の者はサードそしてそれ以上が番外、つまりエクストラとつけられる。噂だけのレベルだが、番外の番外つまりオリジナルエクストラである零の位を持っている者がいるそうだという物もある。面倒すぎるぞ、この制度。誰が考えたんだよ。

「それは総局長の娘であるあなたが気にする」とじゃないでしょう?」

「どうしてそんな事をあなたが知っているのです？」

「否定になつていませんよ。それは俺があなたの父である、神崎宏隆総局長と知り合いだから。何回かあなたのお話は聞いていますよ」

「……お父様はなんと仰つておられたんですか？」

「誰にでも気がきいて、そして優しい自分にはもつたいない娘だと。でもただ一言、構えないので残念だと。自分は仕事にこまけてあなたに構つてあげられなかつたのが、残念だと言つていましたよ」

「そうですか。お父様はそんな風に……」

神崎さんは静かに声も出さずに涙を流していた。俺たちはそれを静かに眺めていた。

喫茶店にて（後書き）

はい、今日は土曜なので毎から投稿してみました。ここ最近は説明ばかりですが、そのうち派手なバトルも入れていこうと思いますのでよろしくお願ひします。

それではまた後で。あるいはまた今度。さいなら～。￥（^__^）

/

「それでどうしてこんな流れになるんですか?」

あの後、ひとしきり泣いた神崎さんは唐突に、稽古をつけてくれませんか?と言つてきた。そしていきなりさつきの裏庭まで引っ張り込まれた。卓也と月花もちゃつかりついてきていた。

「私、強くなりたいんです。今回みたいに誰かに頼るだけではなく、自分の身ぐらいいは自分で守れるように」

「別にそんな事をする必要はないと思いますけど。人には向き不向きという物がありますし」

「それでも、力は持つていた方が良いでしょう? ござとこう時のため」

「否定はしませんけどね。」
「」ともありますし

俺が足を地面に叩きつけるのと同時に、ナイフが飛んできた。だがそれは、俺の足元の影から出てきた者によつて阻まれ、俺は手に籠手を纏わせて飛んできた方向の木を殴つた。それによつて生じた衝撃波で何本か先の枝に足をつけっていた男は落ちてきた。

「ばれたかからつてナイフ投げなくたつていいじゃないですか。えーっと確か、ギルフォードさんでしたっけ?」

「……分かつておられたのですか? 私がいたことを」

「もちろん、貴方の気配を立つ能力は素晴らしいの一言に尽きます。ですが、視線が強すぎます。

あれでは方向はわからないでしょうが、監視されているのがばれられます。

それと魔力の動向ぐらい気をつけましょう。俺が即時結界で大体半

径五百メートル程度の探査術式を使ったのにも気づかれていないようでしたし」

「半径五百メートル！？」

あれ？そんな驚かれるような事だつて……あ、そうだった。普通の術者でも即時結界の探査術つて半径一、三十メートル位だつていやあ、完全に忘れてた。

「直径一キロの即時結界なんて一花様だけの技だと思つてたのに、他の人にも出来たんだ」

「あんな超人と一緒にしないでください。あの人は訓練もせずに大規模攻撃魔術の展開までできたんですよ？しかも六歳で。いくらオーディンの魂を宿してるからってチートすぎますよ」

「チート云々はリーダーにだけは言われたくないけどね」

ええい、やかましいわ。一花とは一桁数字のトップだ。ファースチバンバ

オーディンの魂を宿している魔術界の女帝。そして世界でも有数の実力者。SSSランカーだからな。ちなみにSSSランカーは世界でも三人しかいない。

『一花』・『二木』・『二橋』この三人だけだ。もうやばい。こ

の三人が先頭に出るところだけで、もう絶望しか残らないらしい。いわば、最終兵器つてところかな。

「とにかく。いくら元とはいえ、こんな失態を犯してはいけないと
いう事を言いたいんですよ。俺は」

「そうですね、わかりました。あなたもうランカーとは思えません
が」

「それはもういいです。それじゃあ、始めよつか神崎さん」

「はい、お願ひします。私の事は真由美って呼んでくれませんか？」

「それじゃあ、真由美さんで。参ります」

俺は日本の木刀を構え、真由美さんはレイピアのような形をした木刀を構えた。そして同時に飛び出した。

模擬戦の前に（後書き）

はい、同日連続投稿です。できればこのまま一、二話書かたいと思
います。もう大奮発だー。といつわけで楽しんでいって下さい。

同時に動いた俺たちだが、先に機先を制したのは真由美さんだった。もう何がすごいって、その突撃力と剣捌きだね。一瞬で俺の懷に入つて、俺の鳩尾の部分を本氣で突こうとしてきたし。殺す気かつての。ま、全部弾いたんだけど。

「護衛されてる時から感じてましたけど、さすがに強すぎじゃありません！？開幕の連撃を全部弾くなんて！」

「そりやこいつちのセリフ。なんでこんだけの実力があるのに護衛なんかいるんだよ？」

「それは……私が魔術を使えないからで……」

「…………」

なんじゃそりや。サルジストの純血種なのに魔術が使えないってどうよ？もしかして聖属性も自発的に使ってるわけじゃなくて、垂れ流し状態なのか？どんだけ内包量がとんでもないんだ？

魔術などの知識が世界的に知られることとなつた現代において、魔術を使えない人というのは絶滅危惧種並みに稀少だ。火をつける魔法とかで使用されることもある。まあ、そのせいで犯罪も増えるんだけど。

「初歩の初歩、火の術は使えますよね？」

「それが全然ダメ……なんでききないのか分からなって先生に呆れられたぐらい」

「まあ、いいか。今は関係ないし。それで剣をより磨くと。それなら、もっとアクセルを上げた方が良いですかね？」

「そうですね。お願ひします。手加減は抜きで」

「言いましたね？後悔しないでくださいよ？用並みなセリフではあ

りますが

俺は体の中心に小さな炎をイメージした。これが普段の俺だ。そしてその炎の火力を段々と上げていく。そんな俺の気配をあやしく思つたのか、真由美さんはレイピアを構え猛攻を仕掛けってきた。

両腕、両足、右肩、脇腹、肋骨の部分。とてつもない嵐のような猛攻、だが一発一発の威力は小さく大したダメージにはならないが量が量だ。じりじりと溜まつていく。

そんな猛攻に耐えながら、炎をイメージし続けた。そしてそれが頂点に達した時、一気に爆発させた。それは俺の体の隅々まで肉体強化の術を掛ける物だ。これによつて俺の身体能力は格段に上がる。普段の五倍ほどに。

いきなり俺の姿が消えたことに驚いたのだろう。真由美さんは周りを見回していた。さつき身体能力が上がると言つたが、俺が上げたのは脚力と感覚神経。それによつて俺は今 空中にいた。

いやあ、我ながら飛びすぎた。久しぶりすぎて加減が難しいな。神崎さんの五メートルほど後ろに着地すると、神崎は驚きながら振り返つた。

「いつたい何をしてたんですか？」

「ちょっとした術を体にかけてた。時間かかるからね、あれ。それじゃあ改めて、始めよう」

俺は強化された脚力で真由美さんに双剣で居合抜きをした。それを真由美さんはすんでのところで回避した。鋭いな。攻守は完全に逆転した。俺の文字通り嵐のような猛攻に、真由美さんは回避することで事なきを得ていた。俺の剣は真由美さんと違つて重い。そんな物を連発されていたら相手としては、やつていられないだろう。それでも何とかこちらの動きをつかみ、鳩尾を中心とし星の形で突きの五連発を浴びせてきた。そして鳩尾に掌底を食らわしてきた。

それは魔物用の魔術だった。星の加護を使い聖属性の掌底で相手の急所を突く。とんでもない技だ。

その技を放つことで固まつた真由美さんを魔力で吹き飛ばし、一本の剣を両手持ちにして大上段で斬りつけた。すると真由美さんの持っていた木刀が半ばで粉々に砕け散った。

「そこまで一勝負あり！」

月花の声が響きわたり、俺たちの模擬試合は終わった。ああ、体中が痛えなあ。

模擬試合（後書き）

はい連続投稿第三段！できたぜ！読んでくれる方も増えてうれしいです！

バンザーアー！というわけで次話でまたお会いしましょう！では！

模擬戦の後

模擬戦も終わり、俺たちはなぜか最上階の真由美さんの部屋に招かれていた。……何故？

「申し訳ない。お嬢様も手加減を挑みにかかるのですから。これだけの傷を負う者も珍しいだらう言ひぐらいの傷を負つてますよ」「なんかいろんな所が痛いですから。肋骨が一本ぐらい折れてるか、ひびが入つてますね、これ」

「うつ！……すいません。ちょっと暑くなりすぎてしまつて……」「それはもういいですよ。あなたの強さもよくわかりましたし。あなたの剣筋は我流にしては洗練されているが、流派にしては粗すぎる。あなたの剣はあなた自身が作り上げた物なんでしょう？」

「はい。向こうでは趣味としてレイピアを習つていたんですが、学んでいく内に自分で技を作り上げてみたい、と思うようになったんです。それのほぼ全てをあなたにぶつけてみました。どうでしたか？」

「確かに強い。ですがやはり魔術が使えないというのはまずすぎます。おそらくあなたが魔術を使えないのは、無意識の内に魔力を聖属性に変換して垂れ流しているからです。だから必要な魔力が足りないんです」

「へ？ 私の魔力って垂れ流しの状態なんですか？」

「ええ。無意識下で行われてるせいで気づかないんでしょうね。そうですね……水門をイメージして下さい。魔力の運用という的是全てイメージで賄われていますから。次に垂れ流しの状態になつてそれを閉めて水を止めるイメージをして下さい。……はい、オッケーです。垂れ流しは止まつてます」

「これで魔力が溜まつていくんですか？」

「そうですね。でも、そつそつ全快になることはあり得ない。回復

が早い人でもそうですね、大体三日程度かかります。あ、これはフレンリル所属の魔術師の基準ですから。
まあ全体量がわからないと、どうしようもないんですね？ 真由美さんは魔力の内包量とその回復速度は一線を介していると思いますけどね」

彼女は魔力をほぼ垂れ流し状態で過ごしているにも拘らず、普通に生活している。魔力が枯渇すると、吐き気や嘔吐感に襲われる物だから彼女の魔力総量は計り知れない。

やっぱり純血種としての力が作用しているのかな？ 僕もフレンリル所属の魔術師の大体二十倍ぐらいあるって言われたし。

「それじゃあ、俺たちはこの辺で戻させてもらいますね。卓也、月花行くぞ」

「ういーす。了解」

「え！？ まだ傷は治りきつていませんよ！？」

「大丈夫ですよ。俺の力は少々特殊ですから。それでは失礼します」

俺達は真由美さんの部屋を出た後、卓也と月花は夕食を食べに行くと言っていたが、俺は辞退して部屋に戻りベッドにぶつ倒れた。

今回の特務は色々あつたな。まさかサルジストの純血種と会うことになるとは。ま、なんにせよめちゃくちゃ眠い。そつそと……寝ると……しょづ……。そして俺は眠りについた。

模擬戦の後（後書き）

連続投稿第四段！残念ながらもう日は超えてしまったが大丈夫！まだぎりぎりセーフだ！それじゃ、また今度！（^_-^_-^_）

去り際の一言

「やういえばリーダー。昨日リーダーの影から出てきたあの黒いのは何だつたんです?」

「ん?」

翌日、俺と卓也と用花は朝食をとつていた。ああ、美味しいな。この料理。いやあ役得、役得。朝からこんな美味しい飯が食えるんだから捨てたもんじやないな。

「ああ、あいつの事か。ちょっと待つて。もうすぐ説明してやるから」

「いや、それなら今すぐ説明してくれても……」

「何の話をしてるんですか?」

「おはよウジヤエコモス。真由美さん、ギルフォードさん」

「おはよウジヤエコモス」

一人はちよづど降りてきたようだ。ちなみに卓也飯を食つのに集中してるから、全然話に参加してこない。すると丁度よく注文していたステーキが運ばれてきた。するとそこにはいた皆が怪訝そうな顔をしていた。

「朝からステーキですか?……胃にもたれそうですね」

「これを食うのは俺じゃないからいいんですよ。」

「ほら、飯が来たぞ。そろそろ機嫌直せつて。飯を一食抜いたぐらこじや死にやあしねえよ」

俺が地面、といつより自分の影を足でノックするよつて蹴ないと、そこから黒い狼の形をした獸が出てきた。

出てきた時は不機嫌そうだったのに、できたてのステーキを見る
と食べてもいいかと思念で訊いてきた。まったく現金な奴だ。俺が
どうぞ、ジエスチャーをとるとむしゃぶりついていた。そんな腹
減つてたのかよ。

「あの、リーダー？ この黒い狼みたいなのは一体……？」

「俺の眷属。フェンリルってのは破壊と狼の象徴だ。

お前の槍の素材であるオリハルコンを取りに行く最中にあつたんだ
よ。

それでこいつらの一族と契約し、俺の影に住んでるんだ。俺の命令
は忠実に訊くし、いい奴だぜ？」

「それは別にいいんですけど、大丈夫なんですか？ 魔獣を勝手に眷
獸にするのは認められていないのでは？」

「あんな、お前らの武器を作つてから一年もたつてんだぞ？ ちゃん
と登録してあるさ。

それに好き好んで狼を眷属にする奴はない。たいてい器としての
力が足りず、殺されるからな」

「召喚術者（ティマ）は？ あいつらなりできるんじゃないの？」

召喚術、それも魔術と同時に普及してきた物だ。今じゃあ、ペッ
トとしての契約を交わす者もいるそうだ。まあ、そりや確かに生存
競争が難しい自然よりは安定しているだらうけど……。

「召喚術者（ティマ）が好き好んで狼と契約するわけないだろ。

あいつらは基本的に孤高の生物。

誰かに媚びる事自体が珍しい。お前、狼に真正面から睨まれて平然
としてられるか？」

「無理です。だから狼を眷属にする人つて全然いないんだ」

「そういう事。食べ終わつたな。それじゃあ戻つて寝てる。また仕
事になつたら呼ぶから」

黒狼はこくんと首を動かすと出てきた時と同じように、俺の影に戻つていった。そのころには俺たちも朝飯を食い終わっていた。俺たちは席を立つた。

「それじゃあ真由美さん。ギルフォードさん。任務も完了しましたし、俺達は帰らせていただきます。花を踊らす風が、貴方にもとどかん事を」

「ええ。ささやかな陽光があなたたちを包みますよ！」お元氣で

俺は一礼をした後卓也と月花と一緒に部屋に戻り、荷物をまとめてチェックアウトして車に乗り込んだ。車を動かしてちょうど街と街の境目であるトンネルに入ったところで、月花が喋りかけてきた。

「さつきの花を～のあれにはどんな意味があったの？」

「前にも説明した気がするが、まあいいだろ。要するに健康でありますようにって意味の別れの言葉。

真由美さんが言つたのは、ささやかな陽光のような幸せが包み守つてくれますよ！」って意味だ

「そつなんだ。……そういえばリーダー、めったなことじや名前を呼ばないのに珍しいですね。何かあつた訳じゃないのに」

「……まあいいだろ。少なくとも彼女と俺がまた会うなんて確率としてはそう高くないだろうし」

俺のこの甘い考えが覆されるのは、そう遠い未来ではなかつた。

去つ際の一言（後書き）

昨日は結構な数の読者に来ていただいたのです。嬉しいです。
これからも頑張つていいくのによろしくお願いします！

あの護衛任務から数日が過ぎ、俺はちょいど任務を終えて報告をしている時だつた。花音ちゃんが端末に打ち込んでいた俺に話しかけてきた。電話を持つて。何で電話なんか持つてんだ？

「あの、慎也さん。支部長からお電話ですが」「ん~? はい、もしもし。ラーメン屋・楽軒ですがご注文は何でしょうか?」

「ラーメンと餃子一人前で。できるだけ早く頼むぞ」「はい、かしこまりました じゃねえよ! 何ボケに乗つてきてんだよ、シッコミいれるかしないならスルーしろよ! つい乗つちまつたろうが!」

「お前さん結構無茶なことこいつどるぞ?」「いいんだよ、俺だから。それで? 今度は何の用なんだ?」「ここから支部長室に来い。お客さんもお待ちかねのようじやしないお客さん? また特務なのか?」「まあ、その一環じやな。早くここんと給料減らすぞ」「ちょっとそれ職権乱よ 切りやがった。しゃあない。行くとするが」

俺は花音ちゃんに電話を返すと、端末の電源を落として支部長室に向かつた。まさかこんな短期間で支部長室に一回も入ることになるとは。

支部長室の前にたどりつき、俺は一回ノックをして声をかけた。これはここの間と同じ。でもここからが違つた。

「乾です。入室してもよろしいですか?」「どうぞ。入つてきてください」

中から聞こえた声は真由美さんだった。あれ？また護衛の仕事？そんなわけないよな。あれ？何だろ？そんな風に疑問で頭をいっぱいにしながら、俺は支部長室に入室した。

「お久しぶりですね。お元気でしたか？」

「数日ではそう変わりはしませんよ。真由美さん」今回はびっくり御用で？」

「少しお話がありまして。びっくり席にお掛け下せこ」

「あ、これはどうも。……それでお話とは？」

「えーと、その……」

真由美さんが喋りこくしゃみしているな。いつたいどんな話なんだ？しばらく待っていると、真由美さんは意を決したかのような表情になつて驚愕なセリフを放り出した。

「乾さん。私と婚約してくれませんか？」

ナニライツテイルンダロウコノヒトハ？

驚嘆な一言（後書き）

昨日は諸事情により更新できませんでした。すみません！その代り
今日また更新するつもりです。よろしく！

「ええええ——！？」

俺はすつとんきょううな声を上げていた。だ、だつてしょうがないだろう! いきなり『婚約してくれませんか』だぜ? しうがないだろ!?

「おー、爺ー！これは一体どうこう事なんだよー？」

取り敢えずクソ爺 もとい。支部長に助けを求めた。ところ
が支部長も顔が歪んでいた。え? もしかしてあんたも、真由美さん
がこんなことを言つとは思わなかつた派なの?

「ああ。真由美くん?少し詳細を話してもいいですか?」
「はい。乾さんはクラストの純血種だと訊きました。私もサルジス

なので、婚約して下さいませんか？と申したんです」

うん。見事に話がわからない。つていうか全然話がかみ合ってない。意味わかんねえ……。

「いやいや、待て待て。キミの婚約者は九条君じやろ?他の男と婚約などできる訳ないじやろ」

「条件つて何なんですか？」

「九条さんが今度行われるトーナメントで優勝したら、もう一度婚約関係に戻る、という事です」

「というよりもなんで俺と婚約なんてするんです？」

九条といつたら一桁数字ファースチルでしよう？家柄もバツチリ、実力もあつて言う事無しじゃないですか。なんでその婚約を断つて俺なんかと婚約するんです？」

「あなたはクラストの純血種ファースチルというのが、どういう意味か分かつてない。その血がどれだけ稀少か」

ガンッ！！

俺は目の前にあつた机を叩いて立ちあがつた。ひょっとしてふざけてるのか？この人は？

「俺はこの血を保つための入れ物じゃない！俺は俺だ！この血が滅びた処であなたにとつてはどうでもいい事でしょう？最初から無かつた事になるだけだから」

「……すいません。失言でした。話はもう少しで終わりますから、もう少し辛抱していただけませんか？」

「それで、貴女は俺にどうしてほしいんです？俺にそのトーナメントに出るとでも？あれは世界中の人が予選に勝ち残つて出る物でしょう？今からでは遅すぎるでしょう」

「そこで支部長にお願いがあります。確かに東京支部は前回の大会でベスト4に入つていましたよね？」

「ああ、そういう事か。ベスト4に入った支部は次の大会で一人だけ特別選手を選ぶ事が出来る権限を得る。それを使ってこやつを出せ、と？」

「はい。それにこの大会で優勝すれば、一桁数字ファースチルの人には挑戦する権利を得ることができます。いかがでしょうか？出ていただけますか？」

？」

「やりましょう。優勝すれば俺は一花と戦える権利を得られるんでしょう？それなら、俺は一向にかまいません」

「それでは交渉成立、という事で。ちなみに優勝したら婚約しても

「うーますから

それは結構嫌なんだけど。まあ仕方ない。一花と戦う権利を得られならば、と俺はうなずいていた。結構嫌そうな顔をしながら。

事前交渉（後書き）

短いかもしませんが一話目の連続投稿です。
ここからは～世界代表トーナメント編～の開始です。どうぞお楽し
みください。

帰宅（1）

「それでどうして」「うなつたんだ？」

話し合いも終わり、俺は久しぶりに家に戻ってきた。俺は基本的に家にいない。俺が受ける任務は、大体泊まりがけな物が多い。そこまでは別にいい。いつもの事だからな。

「なんであなたが俺の家にいるんですか！？真由美さん！」

「え？ 何かおかしいですか？」

「いやおかしそぎでしょ！ 俺とあなたは少なくともまだ、婚約者でも何でもないんですから！」

「じゃあ泊めて下さい。宿泊とかお世話になるつもつだつたので」「俺の家は宿泊施設じゃないんですよー？」

何考えてるんだこの人は？ あり得ないけど、もし間違いとかが起つたらどうするんだ？

それとも前の婚約者さんが相当な紳士だったのか？ しかしギルフオードさんも止めるとかしようよ。なんで普通にOK出しちゃつてんの！？

そんな事を考えていると、玄関が開く音がした。このタイミングでドアが開くといつは事はまさかー！？

「ただいま、兄さん。あれ？ お客様？ 邪魔だつたら部屋にひっこんどくけど？」

「頼むから残つてくれ。明美。^{あけみ}後この人をお客さんとは俺認めてないから」

「ふーん。まあどうでもいいけどね。はじめまして、千葉明美^{あけみ}と申します。といつても旧姓は乾ですけどね」

「あ、これはどうも」「寧に。はじめまして、神崎真由美と申します」

「もう聞いたやいないな。神崎さん、客間でいいですか？基本的に用事があったら、明美に言つてください。俺は基本的に地下にこもつてるので」

「地下？」この家、地下もあるんですか？」

「正確に言つと地下じゃないというか……。それは置いといて、客間はこちらです。明美、お前自分の部屋片付けとけよ。お前この家に自分の荷物を送つてくるな。面倒だからな」

「でもあの家には置いとけないし。それにいいじゃん。もうすぐ私もこの家に戻つてくるんだし」

そういう問題じゃないんだけどな。俺の家は二階でもあります
な一階建ての家だ。

コニットバスに洗面所と客間。それに俺と明美と姉貴の部屋。もう使われてないけど、両親の部屋。あと台所と居間。他はほとんど物置状態だ。

そんな事を考へていると、客間に到着した。俺が客間のふすまを開けると、そこは和室になっていた。両親がこの家を建てる時に客間は和室にする、と言つていくなつたらしい。

「はい、到着。まあ、基本的に好きにしてもうつても結構です。なんせ全然使いませんからね。俺はお密さんとか基本的に呼ばないし、明美は千葉家に行つてますからね」

「あ、その事を聞こえうと思つてたんですよ。どうして千葉家に行つてる妹さんが、この家に戻つてきてるんです？」

「この時期だからですよ。大事な行事があると、千葉家は忙しくなりますから。それで帰郷つてかんじで戻つてくるんですよ。それにもうすぐ期限ですね」

「期限？何か約束でもしてるんですか？」

「明美が千葉家に行つたのは小学四年の時でその当時、俺は高校生でした。

俺の力と財力で一人分の学費を捻りだすのは不可能に近かつた。そこで俺が大学を卒業し、社会人となつて養えるようになつたら、明美を乾家に戻すつていう約束をしたんですよ」

「なるほど。あれ？でも確かお姉さんがいらっしゃったのでは……？」

言えないよな。もうその当時から行方不明だつたとは。正直な話、行方不明なのはいつもの事だつたから捜索願とか出してないしな。たまにふらつと絵手紙をよこすけど、それどこのだよみみたいな絵手紙だからな。ぶつちやけ全然場所がわからん。

そんな事を考えていると、ちょうどチャイムの戸が鳴り響いた。
宅配便がなんかか？

「兄ちゃん。お客さんだよ。それも超大物」

は？超大物のお客さん？しかも俺に？いつたい誰だらつと思いつつ、俺は玄関に向かつた。

帰宅（1）（後書き）

全く関係ない話が後もう少し続きますがご容赦ください。もう数話で戦闘シーンも入れていきたいと思います。それでは後程、また会いましょう。では！

帰宅（2）

「なるほどな。確かに前の言つ通り、超大物だつたな」「でしょ？いや、ドアを開いたときは驚いたわよ。え！？なんでここに！？ってかんじでさ」

「それでどうしてあなたたちがここにいるんです！？」一花さん、二木さん、三橋さん！

「え？一度君の家について見ようかなと思つたから」

「まずい物でも置いてあるのならまだしも、別に構わないだろ？？」

「それに連絡なんか入れたら、断られるのは目に見えているしサプライズ的な？」

なんだその理由は……。この三人は一桁数字のトップ。55555
ンカーだ。

前に説明した一花花連さん。二木御剣さん。三橋白枝さん。この三人だ。

基本的にこの三人が戦闘に出てくる事はない。ほとんど行事ごとにしか出てこれない。いや、出れないと言つた方が正しいか。力が強大すぎて同じ前線に建てる人がいないからだ。

三人は神の魂をその身に宿す者だ。

一花さんは北欧の主神、オーディンの魂を。

一木さんはギリシャ神話のオリュンポス十二神のトップ・ゼウスを。
三橋さんは日本神話のトップ・天照大神を。

それぞれの魂を宿している。そして前に単語だけ出てきた神話兵器も持つている。

一花さんはグングニルと二ベルングの指輪を。

一木さんは雷霆ケラウノスと金剛の鎌を。

三橋さんは天叢雲剣を。それぞれ持つている。

「それで部屋はどうするつもりなんですか?」この家に三人も泊める部

屋はありませんよ。客間は真由美さんがいるし上

「小説の批評」由坂山舞櫻著　一九四〇年

—それなら花連と白枝を神崎嬢と一緒に客室にして、

で廻る。これでどうだ?

廣雅

「どうだ？ じやないでしょ……。客間はあいにく一人までです。そ

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

「お風呂がない」

「それなら妹君か姉君の部屋に分けるというのは……」

「思惟の部屋は荷物置き場だ」へ、布団の部屋は「お

一明美の部屋は荷物満載だし、姉貴の部屋はそもそも俺じや開けら

「はい。がんばれ!」
「はい。がんばれ!」

わたし
なにか術立たれてるかな
そこなくでモノのことは思

わんが

二二

「それではどうすればいいのだ？」

「玉川の山が一ヶ所で二つあるが、あれは二ヶ所である。

出で行つてモハのむか一番早しんでまつた…… しごかないあ

の部屋を開けるとするか「

「魔術の世界」

「あの部屋とほどの部屋の事だ？」

「今は二三時頃の部屋です。昂余以外では開けられません」

今は古物……西新の部屋ですよ掃除以外では開いたことなしぐ

ですかね」

俺は一花さんと三橋さんを両親の部屋まで案内した。両親の部屋のドアに手を掛けると

ドクンシーーーーーーーー

きたよ。この肺を絞められる感じ。両親を失われた時から出でる俺の発作だ。その息苦しさを意志の力でねじ伏せ、ドアを開いた。そこには少し埃っぽいが、それでも昔と同じ状態であつた。俺は少し安堵しながら、三人を招き入れて即座に部屋を出た。同時に発作も止まつた。

「どうかしたんですか？」

「ちょっとした発作でね。息できなかつたんですよ。ひょっと待つて下さい」

「うん。それでこいつ使ってもいいの?」

「……構いません。使われた方が両親は喜ぶと思いますから」「できるだけ、そのままにしておくね。こいつは時間維持の魔術がかかつてるから無駄みたいだけど」

分かつてたのか。さすがだなと思いつつ、なぜか俺は気を失つた。

帰宅（2）（後書き）

一番田の投稿です。面白いところのですが。それではもう一、二話
おじょうともこまか。では。

眼を覚ますとそこは、居間のソファの上だった。意識を失う寸前の事を思い出し、ため息をついた。体を起こすと、明美が立っていた。

「起きた？ 兄さん」

「なんとかな。俺どんぐらい寝てた？」

「一時間ぐらいだよ。もうすぐ」飯もできるから早く動いてよ」

「「」飯？ 誰が作ってるんだ？ お前……なわけないか。それじゃあ二木さんか？ あの人料理めちゃくちゃ美味しいからな」

「本人を目の前でそこまで言わなくともいいじやん。作ってるのは三橋さんだよ。試食させてもらつたけど、なかなか美味しかったよ

あの人料理できたんだ……。俺はなぜかそんな微妙な所にショックを受けていた。そして食卓の方を見ると、確かに食欲をそそる匂いがした。これは期待できるかもしれないな。

そんな事を考えていた数時間後、俺はコーヒーを淹れていた。めちゃくちゃ美味かった。二木さんとの遜色が無いぐらい美味かった。俺は淹れたコーヒーを持つて階段の最初の段の所で止まり、地面を叩いた。魔力を纏わせてな。すると地面から不思議な扉が出てきた。そこをぐぐると、俺の研究施設がある。

あの扉は、この地下の空間のゲートの役割を担っている。このゲートを出現させるには、ある一定量の魔力を纏わせて地面を蹴る必要がある。多すぎても少なすぎてもだめ。通った後には、あのゲートは消える。

俺はコーヒーをすすりながら研究所の扉を開けて椅子に座った。目の前に置いてある資料を眺め始めた。ついこの間、支部長にもらった資料だ。タイトルは『新魔法の開発の危険性について』。

「ここは別に俺が作った訳じゃない。ここを作ったのは俺の両親、乾莞爾いぬいかんじと乾瑛美いぬいえいみ。両親はとある魔術の研究の為に、この研究所を作った。

俺がちょうどコーヒーを飲み終えたころにゲートが開き、明美が入ってきた。何の用だ？

「兄さん、ちょっとといいかな？」

「ん~？ 何か用か？ 明美。つていうか皆には伝えてあるのか？」
にいるつて

「もちろんしてきたわよ。それでさ、ちょっと相手してくれない？
どれだけ兄さんに近づけたか、知りたいし」

「構わんぞ。武器は持ってきてんのか？」

「模擬戦みたいなものなんだから、木刀でいいでしょ？」

「真剣で来られても困るがな。多分折っちゃうから」

俺は拳から音を鳴らしながら、修練場に向かった。明美は木刀を下げながらついてきた。

地下施設（後書き）

はいこままで行きました。次の話では妹・明美との試合です。最も試合では終わりませんが。（にやり）というわけでお楽しみに！

妹との対戦

「それじゃあ準備はいいか?」

「いつでもOKだよ。兄さんこそ籠手と木刀だけでいいの?」

「まずは様子見。前は開放させるまではいたなかつただろう? お前がどれだけ成長したかも知りたいしな」

「その考えをすぐ否定させてあげるよ」

俺は木刀を一本と籠手を顕現させ、明美も木刀を一本構えていたが、こちらは背中にさらに一本引っさげていた。どれだけ使う気だよ。

俺たちは同時に構えてそれから一分近く、固まつたままだつた。動き出したのも同時だつた。

俺は単純に振り下ろし、明美は突いてきた。力のかかるところを突かれた所為で、俺の態勢が崩された。

こんな隙だらけな状態を攻撃しないわけがない。予想通り明美は突っ込んできた。俺はバックステップの要領で蹴りを顎に叩きこもうとした。

もちろん千葉家でてほどきを受けているんだりつ。地面を蹴つて後ろに下がつてかわした。面倒くさいな。

「さすがは『天皇剣』^{てんおうけん}と恐れられる千葉家だな。戦闘をよく理解してる。あそこに住んでいるのは伊達じやない、つてことか。成長してるよ。確かにな」

「いや、普通に攻撃してる人に言われても説得力無いし。それに顔が余裕で満ち溢れてるよ」

「この程度で一撃もらひのような、甘い鍛えかたはしてないからな。それにしても楽しいな。まさかここまでしてやられるとは」

俺はもう一度動き始めた。さっきは直線だったが今度はジグザグに。あいつにはもう、俺が地面を蹴っている所しか見えていないだろ。今回は身体強化の術をかけているからだ。

俺は強烈な突きをものすごい速度で放った。ぎりぎりの所で気づいたんだろう。木刀で受け流しつつ、もう一本の剣で撃ちこんだ�다。

確かに技術としては凄い。だが、そんな物を俺が許すわけがない。膂力だけで吹き飛ばした。その勢いに乗り、一気に後ろに後退した。

「兄さんいきなり本気出し過ぎだよ。左手痺れちゃったよ。これは私も本気を出さないわけにはいかないね」

「ほう、俺に手加減できるぐらい余裕だったと。それならもっとギアを上げた方が良いかな?」

「そういう問題じゃないんだけど、ね」

何をするかと思えば、背中にかけていた一本の木刀と片手に持っていたものと吹き飛ばされたもう一本が震えだし、明美の両手に集まりだした。ちょうど獣の爪のようだ。

おそらく魔力で運動させてるんだろう。そしておそらくその剣の軌道は自由自在。どうやっても読めないだろう。なるほど確かに剣士にこれは致命的だな。突き、払い、薙ぎ、捌く。これがより難しくなるのだから。

「だけど甘い。その程度分からぬ筈が無いだろ。天衣無縫と謳われていた母さんに剣を教わっていた俺が」

「そうだね。私も兄さんも母さんと同じ千葉家の血が流れてる。そして母さんはその純血で歴代最強の剣士だった。その母さんに直接教わっていた兄さんにはぬるいだろ? それでも!」

明美は剣を連続で撃ちこんできた。俺は全てを弾き続けた。

そして千日手のように果てしない打ち合いが続いた。だけど、体力ではなく振るつていた剣の方に限界が来た。

そりやあ、本来の剣の一倍だからダメージ量が蓄積されてしまう。俺の力を受け止めてるってのもあるしな。俺の木刀に本がほぼ同時に砕け散った。

好機と見たか、俺に同時に打ち込んできた。俺は鎧を顕現させて同時の攻撃を全て捌いた。まさか全て捌かれるとは思っていなかつたのか、隙だらけになつた。

俺は拳の力で空間をふるわせることで、明美を氣絶させた。ふう、まさかこんな力を使うはめになるとは。俺は氣絶しているが、楽しそうな顔をしている明美の頬をなでた。

妹との対戦（後書き）

はい、兄ＶＳ妹の構図でやつてみました。最後が簡単すぎるだろ
か文句はあるでしょうが、楽しければそれでよし！なので面白けれ
ばOKです。できればもう一話できればいいなと思います。では！

「あれ? ここは?」

俺は研究室のソファで寝かせて、俺は資料を読んでいたんだがどうやら起きたようだ。

「起きたか。具合はどうだ?」

「あ、兄さん。ちょっと気分が悪い以外は何もないよ」

「それならよかつた。ほい、ちょっと冷めちまつてが紅茶だ」

「あ、ありがと。……ところで兄さん。最後に使ったあの技は何?」

「ああ、あれが。あれは震脚の要領で作った技なんだがな。そうだな『空震』ってところかな?」

「鎧通しじゃないから何かと思ったら、新技? 全くあきれちゃうわね」

声は軽いけどな。こうして明美と試合をするのは、正月以来だ。丁度今は五月。大体四カ月ぶりってところか。……あんまり時間経つてないな。

しかし千葉家に預けたのは間違いじゃなかつたか。ここまで育つとはな。あそこは政治にあまり興味が無い。^{エクストラ}番外と呼んでいるのもう外部だけで、あそここの本来の呼び名は『天皇剣』だしな。

「お前こそなんだ? あの技は。柄尻と魔力によつて連結されるところはわかつたんだが……」

「大体それで正解だよ。あとは私の技量の問題になる、って言われたしね。まあ、兄さんの鎧姿も見れたし、これはこれで満足だけどね」

「やつがい。お前に鎧姿を見られる日が来るとはな。」れも時の流れってものなのか」

「兄さん、ちよつと爺ぐわこよ。そんな」と言つてると禿げるよへ。
「禿げねえよ！全く失礼な奴だな。それでもお前は強くなつたよ。
母さんだつて誇らしく思つてゐた」

「……ほんとにやつ思ひへ？」

「思ひよ。俺が母さんや父さんとの事で、嘘なんかつく訳無いだろ。
お前は誇つていこんだよ」

「……うん」

やつことと、明美は静かに泣き始めた。俺は隣に座つて静かに頭をなでた。すると顔を上げて泣き始めた。それでも俺は静かに撫で続けた。

「ありがとう、兄さん。いま思い出したけど、私今度のトーナメントに出るんだ。よかつたら見に来てね」

「それ、俺も出る事になった。とある依頼でな」

「それじゃあ、もしかしたら予選で当たるかもしれないね」

「いや、それはない。支部長推薦で予選突破のシード状態から始まるらしー」

「ええー。なんかざるーい。それ誰からの依頼なの？」

「さすがにそれは言えないな。まあ、お前の試合は応援してやるから。頑張つて本戦まで残れよ」

「ふつー。分かつてるよ。兄さんも本戦で負けないよつこねー！」

「俺が負ける訳無いだろ。優勝者にはHキシビシヨンマッチの権利が得られるらしいからな」

「Hキシビシヨンマッチつて……やつぱり一桁数字の？」

「やつやそうだ。俺がそれ以外で燃える訳無いだろ？」

「ああ、やつやそうだね。やつぱり本命は一花さん狙い？」

「の人ほど強いのはそつとくこないしな。当面やつぱり一花さん

かな

「ふーん。まあ頑張つて。それじゃあお先に。おやすみ」

「ああ、おやすみ。お前明日学校だつて。それじゃあ朝食用意して
いてやるよ」

わーい、とか喜びながらゲートを開いて帰つていた。俺はこの後、
日付が変わるまで研究室にこもつて魔術の研究をした後、自分の部
屋に戻つて寝た。ちよつと一木さんを蹴つてしまつた事は秘密だ。

家族の談話（後書き）

今日はこれで終わりですが面白かつたらいいな、と思います。それではまた明日も頑張っていきましょう。僕も頑張らつと思いませんので。では！（^――^）／

あれから数日が経ち、この日を迎えた。つい。トーナメント当日を。とはいっても今日は予選だけなんだけど。

「皆さん、お待たせいたしました。ここに世界代表トーナメントの開会を、宣言致します！」

「ウオオオオオオオオ……ツ……」

「この行事」との為だけに作られた国立の特別ドームに、もう隅から隅まで人、人の山だ。ちなみにこのドームは最高十万人近くの人を収容できるらしい。

そんな事を言っている俺は現在、特別選手用の席に着いていた。今日一日、ここから見ているとの御達しだ。面倒だな。

「面倒くさそうな顔してるね。そんなにここに居るのが嫌なのかい？」

「確かに面倒だけど、別に嫌つて訳じゃないよ。そういうお前は平気なのかい？レジル」

「そりやあ僕だって暇だけど、まあ役得つて事でいいんじやない？こちらの手の内を明かさずに、相手の実力がわかるんだから」

「何か黒いぞ。大体ここに選ばれる人間は、そもそも能力も実力もばれてるだろ？」

なあ、そうじやないかい？『四元素』殿？^{フォースエレメンツ}

「その呼び名は嫌いだよ。そんなこと言つてるなら僕もこう呼んじやうよ？『白銀の神狼』君つてさ」

「ああ、それは御免だな。ところでどうしてここに俺ら三人しかいないと思う？っていうか黙つてないでお前も喋れよ。ジエルザ」

「別にいいでしょ？静かにしてたつて。っていうかレジルはまだし

も、なんで慎也もいるわけ？」

「……ちょっと事情があつてな。そこはあまり突っ込まないでくれ
「そつ。それなら構わないわ。もう始まるわよ。ちやんと見てなさい」

「へイへイ、わかりましたよ、つと」

この二人は前回大会で四位と三位になつたレジル・ハルベスと、
ジェルザ・ヘレウス。とある任務で一緒になつて、そこで話して意
気投合した。今やすつかり友達だよ。

レジルの二つ名は今説明した通り『四元素』^{フォースエレメント}。四元素、つまり炎、
水、風、土の属性を自由に操り、混合させたりして使う所からその
二つ名がついた。

ジェルザは『黒銀鉄鎧』^{フュルミカネルナ}。文字通り黒銀色の鎧をもう自由自在に
操る技術を有している。

俺はもうまんま過ぎだろといつ『白銀の神狼』だ。俺が鎧を纏つ
て走る姿から、神喰狼が連想で来たから付いた、そうだ。そりや神^フ
喰狼身に宿しますから……。

予選はバトルロワイアルによる数減らしと一対一の試合形式のこ
の二つを行うらしい。この予選参加者、千人ほどいるらしいからな。
縛りが特に無い所為らしいが。

「お、彼女とか強そうだね。あそこで双剣使つてる彼女」

「ん?……ああ、ありや俺の妹だ。おい見ろよ、あの盾持ち。ひよ
つとして『無敵防御』^{ガードナ}じゃないか?」

「え?あ、ほんとだ。彼の防御破るのつて難しいんだよね。ああ、
可哀そうに。向かつっていた人達皆、吹き飛ばされてるよ。あれ攻撃
全部跳ね返すからなあ」

「ある意味チートだよな。まあ跳ね返せるのが物理攻撃だけなのが
唯一の救いだが……」

「そうだねえ。ねえジェルザ、あれ誰かわかる?あの黒い剣振るつ

てるの」

「あれは『黒帝剣』でしょ？さすがは世界代表トーナメント。今年は一段とレベルが高いわね」

「ああ。ざっと見ただけでも、有名な奴らが大量にいるし。これ何人になるまでやるんだっけ？」

「確か僕たちシード組合させて三十六名だから……三十二人だね」

「この分なら早く終わりそうだな。本戦の方が時間がかかりそうだし。予選三日、本戦を一週間ぐらいかけてやるんだっけ？」

「そうね。そうそう簡単に負けないでよ？あんたらと戦える機会なんてそうそう無いんだから」

「「もちろん。あたりまえだろ（でしょ）？」

俺たちは予選の観戦を尻田にこんな約束をしていた。結局この日は最後まで、最後の残る一人は来なかつた。いつたい何があつたんだろ？

予選初日（後書き）

できるだけ毎日一本のペースで書いていこうと思いますので、よろしくお願いします。昨日のユニーク数が百人を突破して気分がハイになってるあかつきいろです。

そんなわけで始まりましたよ、世界代表トーナメント。主人公や仲間たちの活躍を描いていこうと思いますので、どうぞお楽しみください。それでは、アディオス！

本戦第一回戦（1）

あれから二日後、つまり本戦の日を迎えた。俺たち三人は一緒に会場に入った。

予選でも思つたけど、盛り上がり過ぎじゃね？いくら三年に一回しか無いとはいえさ。初め訊いた時はオリンピックのパクリか！と思つたが。

俺たち三人と観戦会に来なかつたシード組最後の一人、なんでもその人が九条たいと前は確か泰斗たいとだつたかな？四人が指定の位置に立つた。つまり、真由美さんの元婚約者らしい。名

すると戻が光り始めたりまでの文字が「ンタム」は表示され始めた。なんだこれ？

一分後には文字の動きが終わり、俺の足元にはCの文字が表示された。レジルはD。ジェルザはA。九条さんはB。

「各ブロックのシードが決まりました！」

Aブロックのシードはジュルザ・ヘレウス！Bブロックのシードは九条泰斗！

ベス！」

一つを読むごとに歓声が上がった！ そんなに声を上げられるほど有名か？ そして残り三十二名のブロックの抽選が始まった。今日はAブロックの一回戦をやるらしい。

とするや。そんな事を考えていた俺の目の前の人人が立っていた。

「何か俺に御用ですか？九条泰斗殿？」

「その話し方は瘤に障るな。止めてくれるかな？」

「それは構いませんが。それでどんな御用なんでしょうか？」

「いえ、ただ私と争う事になるライバル殿の顔を拝んでおこうと思

いまして」

「そうですか。それでは失礼します」

「ええ。……貴方にだけは決して負けません」

好きにしてくれよ。俺にとつてはそんなことはどうでもいいんだから。ただ俺の目指す物は優勝して一花さんと戦う。ただ、それだけなんだから。

「始まつたか？」回戦

「もうすぐだよ。それにしてもいつたい何したのさ。あの……九条君だっけ？ライバル指定されるなんてさ」

「ちょっとした私用だよ。それで一回戦の相手は？」

「千葉家と八市家の次期党首同士の対戦だよ。剣の一族と風の一族

同士の対決だ。初つ端から面白くなりそうだね」

「番外と一桁同士の対決か。そりや面白そうだな」

八市家が風の一族と呼ばれているのは風を読むのが上手く、弓矢の技術が半端じゃ無かつたからだ。だがバトルフィールドには風がない。そう思ついたら……

「え？ 戰闘つて異界でやるのか？」

「そりやそうだよ。この大会はあくまで実践としての技術を図るのが目的なんだから。それにこのまんまじや千葉家が有利すぎでしょ

「そりやそりや……なんだかな？」

「

「ほらもう始まるよ。これを見ない手はないでしょ」

えーっと、フィールドは草原？これはハ市家の方が有利過ぎじゃないかと思つたら、千葉家の次期党首……確か竜次だつたか。開幕当初に草を全部切り払いやがつた。つぐづく思つてたがバケモンだな。

ハ市家の方は女性で佳奈実つて名前だつた。佳奈美さんは懐から一本の弓を取りだし、それを展開し始めた。そんな隙だらけの状態を放つておく訳が無い。竜次君は走り出した。

すると地面に魔法陣が展開され、そこからまるで台風のような烈風が吹き乱れた。当然、竜次君は後ろに下がつたが瞬時に考えを変え、烈風に向かっていき風の魔法をぶつた斬つた。

「うわあ。あんなのあり？」

「刀剣を持たせれば千葉家の人は間は全員化け物だからな。あれぐらいの芸当、訳ないさ」

「それにしたつて魔術を斬るなんて、僕にも出来ないよ？」

「お前何さまだよ……。あそこの人間を同格で見ない方が良い。あそここの鍛錬はアホみたいに刀剣にどっぷり浸からせるからな。あそこの党首にはいまだに勝てない」

「ところでハ市家の人が出した弓つて神弓かな？」

「間違いないだろ。韓国と朝鮮の伝承を持つ弓。これは予想以上に面白くなりそうだ。」

あの刀はおそらく称々切丸だ

「勝手に出て行つて妖怪を斬り殺すことで有名な？」

「そつ。でも、あの刀は退魔の力が強い。魔力で作られてる魔術は、相性が悪い」

はさて、この戦いの行く先はどうなるかな？

本戦第一回戦（一）（後書き）

「そりいえば慎也」

「なんだ？」

「ジョルザはどうにいるの？全然姿が見えないんだけど」

「……お前、それジョルザに会つても言つなよ？」

「なんで？……あ」

「思い出したか？あいつなら多分、トイレスでうずくまつてゐるのを」「そりいえばジョルザってめちゃくちゃフレッシャーに弱かつたよね」

「……」

本当に大丈夫かな？あいつ。

本戦第一試合（2）

剣と弓の激突は続く。神弓^{シンクン}と称々切丸。どちらもそれなりに有名な武器なだけにスペックはほぼ互角。後は持ち主の力量の勝負。

「魔力を乗せて撃つてるね。普通ああいう類のは加速されてるから、弾ける訳無いんだけどな。見事に弾いてるよね、彼」「だから同格視するな、って言つてるだろ？彼の持ち前の動体視力だろう。あそこは感覚に頼る人が多いからな。そこを潰されたら終わりだ。それでもどうにかしちまうこともあるんだよな」「まあ近づいてもかわされてるしね。そろそろ終わりも見えてきたかな？」

「さあな。ただ言えるのは……」

「言えるのは？」

「そんな簡単に終わるほど、千葉家の剣士は甘くないってことだ」

事実、矢の感覚も掴んできているんだろう。捌く技術が上がつてる。突然竜次君が加速した。捌くのを止めて攻勢に転じるようだ。

もちろんそれを黙つて見過ぎ^{すば}すほど、佳奈美さんも甘くない。三本を同時に引き絞り、放つた。もちろん魔術を掛けて。

竜次君がそれを切り払おうとするが、矢が勝手に動き剣撃をかわした。無理矢理体勢を変えて、矢をかわしたのはいいが、その矢が追ってきた。

「まさかあれは、追尾術式？そんな馬鹿な！？」

「現代の魔術の技術で不可能とされた追尾術式……。それを開発してたつていつのか？そんな事が出来るほど八市家の技術水準は高いのか？」

「それでもだよ！いくら技術水準が高かるうと、魔力の持続性の問題で術式は完成してないんだよ！？それなのに、どうやって解を見いだしたって言うんだよ！？」

「とりあえず落ち着け。何かヒントがあるはずだ。何か……」

竜次君が肩口に目を向け、何かに気づいたような顔をした後矢に当たる寸前で刀を振った。そしてそれをかわすと、矢は竜次君の後を追つてこなかつた。

「まさか……」

「何かわかったの？」

「あれは追尾術式じゃなくて、ワイヤーか何かひっかける物で追いかけてただけなのかもしれない。

追尾術式は無くとも、その速度を維持し続ける事だけならできる。そうだな？」

「ああ、うん。でも盲点だったね。まさかワイヤーの類を使うなんて……」

「確かに戦術を試すにはいい技だな。たいていの奴はお前みたいに動搖して、その間にやられちまうからな。ある意味で千葉家が刀剣一択だつたのが良かつたな。魔術を下手に齧つてたらやられてたぞ」「うん。一人ともすごいよ。そんな案を実行するハ市家の人も、それを見破った千葉家の人も」

「今回は確かにレベルが高い。こんなのが一回戦から当たるんだからな」

竜次君が足に力を込めていた。何かと思ったら肉体活性の術式を使いだした。つて、はあ！？

「なんで魔術使つてんだよ！？」

「確かに。一回戦から驚きの連発だよ。一人ともすげえぞ！」

一気に距離を詰め、竜次君は一応刀の刃は刃抜きしているとはい
え、あれだけ強烈に叩きこめば肋骨の一本は少なくとも折れている
だろう。

これで一回戦か。これは今回の大会、参加できてよかつたかもし
れないな。

本戦第一試合（2）（後書き）

もう今日中にもう数話になりますので、よろしくお願ひします。トーナメント編、本格的に始動し始めました。面白こと思つてくれるといいな、と思います。では。

▲プロシク終了

本戦の最終試合は明美とナルジア・ベクセン君だった。

「妹君だつたつけ？あの子」

「ああ。まあ、相手の力量を見る限り大丈夫だろ」

「あれ？結構余裕だね。つていうか相手の子の試合、見てたの？」

「うんにゃ、見てねえよ。でもわかるよ。ちゃんと見てれば、な」「なるほど。彼の霸気を見ていた、と」

まあ、そうでなくとも実力が伴っていないのはわかる。いや、ここに残るぐらいいだから強いんだろうけど、明美と同等とはいえない。明美は試合開始と同時に攻め立てた。ナルジア君は槍使いらしく明美の剣戟の全てを辛くも凌いでいる、という状態だった。ありやあ、長くは持たないな。

「あ、吹き飛ばされた。残念だつたね。昨日の疲労が取れてないのかな？」

「そうだとしても負けてちゃ話にならねえだろ。つていうかほんとにあいつ戻つてくるのか？」

今日あいつの出番が無いのひょっとして忘れてんじやねえの？」

「ありえるありえる。でも、別に問題無いんじゃない？残らなきやいけない、なんて取り決めは無いんだから」

「それを考えると、俺らはよほどの暇人だよな。ずっとこんなところに残つてるんだからさ」

「別にいいんじゃない？そのぶん面白い試合も見れたしヨロツてことで」

「ん？試合終了の笛がならないぞ。何やつてるんだ……つて、え？」

なんと試合はまだ続いていた。ダガーを一本持つて明美と打ち合っていた。その剣捌きは素晴らしい美しい、の一言に及きた。でも……。

「ただ綺麗なだけだ。実力は変わらないな」

「うん。それよりは彼女の剣舞のほうが綺麗だし。全体的に負けてるよね」

「ああ。最後にあいつの剣舞を見たのは一年も前だけ……やつぱり綺麗になってる。あんだけ綺麗だとはな」

「妹さんが成長した姿はどう?」

「あいつは俺や母さん達の誇りだ。よかつたな、と思つた。あの時あいつを千葉家に預けたのは間違いじゃなかつたんだ、と思つよ」

最後は側頭部に蹴りが入つて相手が氣絶して試合終了。あいつが笑顔で手を振つている姿を見ながら、これまでの色々な事を振り返つていた。

あれから五年、いろんな事があつたけどここまで来た。それは無駄じゃなかつたんだと思う。俺はもっとと強くなる。俺の身の周りの人ぐらいは、守れるようになるために。

そう決意を改めながら、俺は自慢してくる明美を連れて家に帰つた。

▲プロlogue（後書き）

はい本日二番目のことでした。楽しんでもらえてますか？それでは次の話を書こうと思います。では。
あ、祢々切丸はジャ○プの某作品の影響で出したわけではありません。あしからず。

その日の夜

「ねえねえ兄さん。私の活躍はちゃんと見ててくれた?」

「見てたって。でもなあ、いかんせん相手と実力差があり過ぎだな」「あ、やっぱり?なんか弱いなあって思ったのよね。失礼だからその場では何も言わなかつたけど」

「控え室に着いたらほそつと咳いたんだろう?」

「イグザクトウリイ!分かつてるじやない、兄さん」

「まあな。家族なんだからそれぐらいわかつてるつて」

その日の夜、俺は明美と居間で喋っていた。俺の家の風呂は異界に繋いでいるから結構広い。

二木さんは武器 金剛の鎌の手入れをしている。残りの三人 真由美さんと一花さんと三橋さんは今風呂(つていうかもう温泉)に入っている。明美も入っていたんだが、先に上がつたらしい。

俺はというと、紅茶を飲みながら菓子を摘まみつつ小説を読んでいた。もちろん俺だつて読書の一つや二つはする。とはいっても基本的に薦められた物だけなんだが。

そしてちょっとと読んでいると、明美に紅茶を淹れてくれとねだられたので、淹れてやつた後今の状態に至る。

「――上がりました――」

「やあ、湯加減はどうでした?」

「気持ちよかつたですよ。でも、いつも入つてるわけじゃないんですね?異界だから電機代とかからないし」

「ええ、まあ。俺はいつもこの家に帰ってきてる訳じゃありませんから。気にいつてもらえたのなら何より、ですけど」

「いいなあ、あそこ。なんというか肩こりみたいな物が無くなつて

いくし。何より、気持ちいんですねえ

「そりそり。あれで全然使ってないだなんて勿体なさ過ぎですよね

！」

「確かに。まあ、この家に戻つたら存分に使わせてもいいつよ。今から楽しみになつてきたなあ」

「明美ちゃん、ずるーい！私ももつと入りたーい！」

なんじやこには……。面倒だな、と思いつつも何も言わずに黙つて俺は紅茶を飲んでいた。空になつたんで俺がティーカップを片付けようとすると、真由美さんが話しかけてきた。

「あの、その紅茶私ももらつていいいですか？」

「え？ 別に構いませんが、ちょっと待つてもらつてもいいですか？」

「構いませんけど……何かあるんですか？」

「いや、単純に淹れる時間が欲しいというだけなんですが……」

「なにそれ！私も欲しい！」

「頼みますから落ち着いて下さい。一花さん、完全にキャラ崩壊を起こしますよ」

「別にいいじゃん。だからほら、早くー」

「はいはい。三橋さんもります？」

「うん。それじゃあお願ひしようかな」

この後紅茶を淹れて俺は一木さんと一緒に風呂に入つた。上がつて五人と合流すると、置いといた酒を開けたらしく、完全にできあがつていた。この四人に絡まれつつ、俺と一木さんは騒がしい夜を過ごした。

その日の夜（後書き）

おやじく本日最後のコマです。明日から「田中なべ」を書いてこまが
す。それではできればまたお会いしましょう。では（^-^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3483y/>

白銀の鎧と黄金の剣

2011年11月26日21時45分発行